



高齡マアテ林



白滝アテ天然林



アテ試験地の択伐林



元祖アテ

# 日本森林学会による 日本の林業遺産を知ろう!

## 能登のアテ林業

一般社団法人 日本森林学会 林業遺産選定委員長 京都大学 ふかまち か つ え 深町加津枝

石川県能登地方のアテ林業に特有の技術体系は、江戸時代中期から発展してきました。アテは、ヒノキアスナロ (*Thuopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. var. *hondae* Makino) の地方名であり、能登を中心とした日本海側に分布しています。アテ材は、「能登ヒバ」とも呼ばれ、湿気による腐朽に対して強い特性を持ち、建築材料などとして利用されてきました。アテの品種は、発根力と材質に重点をおいて選抜、淘汰されてきました。赤褐色でなめらかな樹皮でねじれのあるマアテは輪島市に分布し、灰褐色でスギ肌状のクサアテは穴水町に、ねじれないエソアテ、スズアテはそれぞれ七尾市、珠洲市と能登町の一部に分布します。ゴツゴツとした樹皮でねじれがあるカナアテは全域に分布します。

奥能登にはアテの天然生林が点在し、輪島市門前町浦上地内の「元祖アテ」は、樹齢約450年とされています。同地域にある高齡マアテ林は、林齢約180年、幹回りが260cmを超える大木の造林地です。アテの人工植栽の面積は、江戸時代に輪島漆器の林地などの需要が増加するにつれ拡大してきました。主に小規模な農家林家の副業的経営の中で造林が行われ、耐陰性が強いアテの特長が最大限に活かされてきました。1972年発行の

「アテ造林史」(斎藤晃吉編、石川県林業試験場)には、アテ造林の歩みやアテ材の特徴がまとめられています。また、石川県健康の森には森林科学館があり、アテ林業などの展示があります。輪島市三井町にはアテ試験林があり、様々な調査研究が行われてきました。

アテの更新には、強い発根性を利用した「伏条更新<sup>注1</sup>」、「直ざし<sup>注2</sup>」、「空中取り木<sup>注3</sup>」という方法があります。施業にあたっては、林齢の異なったアテを同時に育てるとともに、アカマツやスギなど他の樹種と混交することにより、継続して森林資源を利用する工夫がなされてきました。石川県農林総合研究センター林業試験場の小谷二郎さん(森林環境部長)は、「アテ材は、優れた性能に加え、ヒノキチオールを多く含み、シロアリに強く耐久性が高いことが分かっています。アテ林業は体系化された素晴らしい林業の一つで、資源量をどうやって維持して増やしていくかがこれからの課題。」と語っています。



アテの空中取り木



アテの柁目板を使った丸盆



輪島キリコ(輪島キリコ会館)



行政、研究者、製材業者の連携

江戸時代、アテ材は漆器の木地や漆を塗るハケの材料などとして主に輪島で利用されました。丸盆などの曲物生地には主にアテの柁目板が使われ、薄い板を水に浸し柔らかくして輪に曲げて作られました。能登のキリコ祭の切籠<sup>こ</sup>(注: 切子灯籠を縮めた略称で、神輿とともに氏子たちによって、練り歩かれる巨大な御神灯のこと。)には部に適した木材が使われており、しなりと強度があるアテ材は、柱や担ぐ棒に利用されてきました。またアテ材は、船で金沢に運ばれ、屋根を葺く材料や帆船の帆柱としても利用されました。石川県奥能登農林総合事務所の一二三悠穂さん(林業指導専門員)は、「林業遺産を通して山側と町の人たちが、互いをもっと知り、身近に感じてほしい。アテがどこでどうやって育てられてきたのか、持続可能な森林経営の本質をたくさんの人に伝えていきたい。」と熱く語ってくれました。

明治期以降になると、アテ材の需要増加に伴い、薪炭林伐採跡地などで拡大造林が行われ、クサアテの単層林が拡大しました。一方、林業を取り巻く状況が変化する中で、択伐林を維持した林分が少なくなっています。林業従事者が減少し、将来のアテの後継樹をどうするかなどの課題があります。そうした中で、林業従事者、行政、研

究機関などが連携し、低コスト施業を目指した新たな取り組みが始まっています。また、地元製材業者による能登ヒバのブランドを活かした新たな商品開発、材の長所を活かした集成材やCLTへの研究開発も進められています。

能登森林組合の亀井順一郎さん(代表理事組合長)は、「能登では海と山、農林漁業が上手く繋がりがら暮らしが成り立ってきました。アテは能登の林業振興に欠かせない重要な資源ですが、成長にはとても時間がかかります。森づくりの始まりは苗。先人たちが増やしてきた大切なアテを守っていくため、森林組合ではこれからもアテの苗木を作ろうと考えています。」と将来を見据えます。

能登地方の森・里・海の繋がりの中で育まれてきたアテ林業は、地元で暮らす人々の深い思いとともに地域固有の木の文化や景観を支え、これからの新しい日本の木の文化の発展に大きな役割を果たすことが期待されます。

注1 地面近くから横に張り出した下枝が地面に接するとその枝が根付くことを利用した更新方法

注2 挿し穂を直接林床に挿しつけ、株を作る更新方法

注3 枝を剥皮し、そこにミズコケなどを巻き付けることにより根を出させ、そこを切り取ることで新たな株を得る方法

写真提供… 小谷二郎氏、一二三悠穂氏